

教育課程研究指定校事業実施計画書（平成26年度）
 — 研究課題 2 小学校 —

都道府県・指定都市番号	36	都道府県・指定都市名	徳島県
-------------	----	------------	-----

公立 ・ 私立 ・ 国立 (○で囲む)

1 研究指定校の概要

ふりがな 学校名	とくしまし ふくしま 徳島市 福島 小学校						ふりがな 校長氏名	なが い あき とみ 長井 明 福
所在地	〒770-0868 徳島県徳島市福島1丁目7番28号 電話 088-622-8197 FAX088-622-8296 E-mail fukushima_es@tgn.tcn.ne.jp							
(H26.4.1 現在)	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	(H26.4.1 現在。臨時的任用の者は常勤の者のみ含む) 教員数 33名
学級数	3	3	3	3	3	3	18	
児童数	75	82	88	78	87	94	504	
特記事項	他に特別支援学級3学級11名在籍 通級指導教室が2教室							

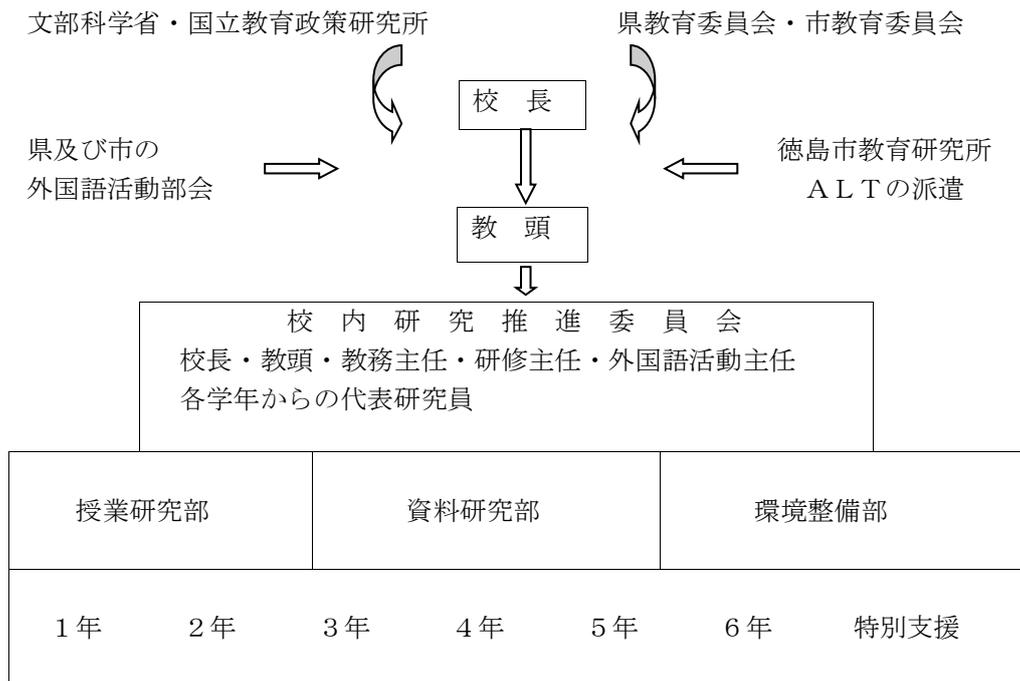
2 研究主題

教科等名	外国語活動	教科課題番号等	①
学校における研究主題	コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動 — 「たのしむ」「かかわる」「つながる」活動を通して —		
研究主題設定の理由	<p>「知識基盤社会」の到来や、グローバル化の進展など急速に社会が変化しようとする、これからの時代に生きていかねばならない子どもたちには、様々な資質や能力が一層求められている。とりわけ、他者と切磋琢磨しながらも異なる文化や歴史に立脚する人々の共存を図ったり、共存する様々な相手の立場を尊重し理解した上で、自分の考えや意思を表現したりすることは不可欠である。まさに、子どもたちが自分への自信や将来への夢をもって生きていくために、また自他の違いを認め、思いやりの気持ちを持って様々な人々と関わり合って生きていくために、コミュニケーション能力を高めていかねばならない。</p> <p>しかしながら、本校の子どもたちは、友達とうまくコミュニケーションがとれずにトラブルになったり、語彙が少なく場に応じた声ではきはきと自分の考えや思いを表現できなかったり、他者への働きかけの意欲が乏しかったりする実態がある。本校の課題の一つとして、言語力、特にコミュニケーション能力があげられる。</p> <p>そこで、各教科等の目標や内容、子どもたちの発達段階を考慮して、言語活動の充実に向けて計画的に取り組み、授業改善を図りたい。その際、外国語活動においては、子どもたちのコミュニケーション能力を日本語とともに外国語という切り口で高めていき、コミュニケーション能力の素地を養うことを目的としたい。</p> <p>この取組による「求める子どもたちの姿」を次に掲げ、研究実践していきたい。</p> <p>①外国語を聞いたり話したりすることを通して、言葉の面白さや豊かさに気付き、言語を用いてコミュニケーションを図ることの楽しさや大切さを知り、積極的に人と関わろうとする子ども。</p> <p>②様々な人との関わりを通して、多様なものの見方や考え方があることに気付くとともに、自分自身のよさや自分が住む国や他国の文化のよさに気付き、違いを認め合い尊重してコミュニケーションを図ろうとする子ども。</p>		
研究の内容や方法等	<p>研究内容 1</p> <p>「全ての教科・領域における言語活動の充実を土台にした外国語活動」</p> <p>1 全学年による「共に学び合い・高め合う」ための言語活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の向上・言語能力の育成・論理的思考力の育成を目指して ・ゴールイメージの想定、具体的な培いたい力の確定 		

	<ul style="list-style-type: none"> ・「聞く→聴く→訊く」を各学年の発達段階に応じた手立ての工夫 ・学級経営をもとにした話し合い活動の充実 <p>2 系統性と相関性をもった年間指導計画の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達段階に基づいて、学習の内容系列の明確化 ・他の教科領域との相互関連をクロスカリキュラム的に計画作成 <p>3 Hi, friends! の効果的な活用と他教科等との関連付け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Hi, friends! の特性を生かした活用法の工夫 ・様々な教科・領域との関連付けの工夫 <p>研究内容 2</p> <p>「子どもたちがより具体的な目的意識・相手意識をもって主体的に活動する外国語活動」</p> <p>1 問題解決的な単元構成の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの活動に必然性をもたせる学習過程 ・活動に必然性がある単元の流れづくり ・子どもたちの意識が流れるような単元作りの工夫 <p>2 協同的な活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペア・グループ・全体の活動形態の工夫 ・他者との協同的にかかわりを通して <p>3 聞きたい・伝えたいという場面設定の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的意識と相手意識の明確化 ・その方法としてのコミュニケーション ・無理のない場面設定の在り方 <p>4 単元の展開と授業実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な学習指導を中心にして ・授業の公開や研究授業の中から学びの質的向上 <p>研究内容 3</p> <p>「学習活動の振り返りを大切にして、教師による見取りを指導に生かしたり、成長・よさを自己肯定に結びつけたりする外国語活動」</p> <p>1 振り返り・評価カード等の工夫改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ねらいに合致したカードの作成 ・カードそのものの工夫改善 <p>2 指導支援に生かすための教師による評価の充実と工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各単元ごとの評価規準 ・単元及び授業レベルでの具体的評価方法の工夫 ・次なる指導に生かす手立て作り <p>3 自己肯定・他者尊重に結びつけられる自己評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意図的な自己評価の場の設定 ・友達等の他者への理解、自他の考えを尊重し合う態度 ・自己肯定につながるリフレクションの在り方
<p>成果の検証方法等</p>	<p>1 定期的な意識等の調査 教員・子どものアンケート紙法による調査結果を分析して検証</p> <p>2 学校評価の活用 教職員自己評価や保護者アンケート及び学校関係者評価結果を分析して検証</p> <p>3 子どもの学習状況評価・自己評価 子どもの作成物・振り返りカード・ワークシート等を分析して検証</p> <p>4 教員によるカリキュラム・授業評価 学習活動の深まりや子どもの変容を総括的に考察して検証</p> <p>5 授業研究会・対外的な研究活動や授業公開等による意見聴取 県市外国語活動部会や招聘した指導助言者からの指導事項等を考察 県市教育委員会指導主事・市教育研究所等々からの指導助言等を検討・考察</p>

3 研究体制等

校内研究推進委員会が中核となり、全教職員が共通理解し、協働体制をとり、一致協力して研究推進する。



4 研究計画

実施時期	研究内容、研究方法、成果の公開等	期待される成果等
第1学期 (4～7月)	全体計画と年間計画を確認及び校内研究推進体制の整備 研究テーマ及び研究構想の確認と共通理解 教育課程研究指定校計画書の作成・提出 児童等の実態調査① 国研において教育課程研究指定校連絡協議会に出席 市教科等別研修会（外国語活動部会との連携） 直山教科調査官を招聘した授業研究会 1学期の研究まとめ 成果と課題の整理 児童等の実態調査②	本校が実践していこうとする計画と取り組む研究について、再確認し共通理解することにより、研究推進が図られるとともに、市内を中心に各学校へも周知できる。 めざす子どもの姿が、より具体化される。
第2学期 (8～12月)	校内及び講師招聘での研究大会用指導案作成 講師を招聘した講演と研究討議 2学期以降の指導計画 授業実践を通じた研究 授業実践→新たな課題 →課題解決のための協議→授業実践 研究大会の開催 2学期の研究まとめ 成果と課題の整理 児童等の実態調査③ 実態調査の分析・検討	県市部会と一体となり、単元づくりや理論研究をしていくことにより、各学校との研究推進が共有化できる。特に、授業研究会を通しての成果が期待できる。

<p>第3学期 (1～3月)</p>	<p>3学期の指導計画 授業実践を通じた研究 授業実践→新たな課題 →課題解決のための協議→授業実践 研究成果の再検討による成果と課題 ・成果の整理 ・課題の検討による次年度の研究課題設定 国研の研究指定校発表会で発表 27年度の全体計画と年間計画を作成 教育課程研究指定校成果報告書の作成 各関係機関等への成果報告 研究成果のホームページへの掲載 県市の外国語部会及び次年度研究校への引き継ぎ</p>	<p>定期的な児童等の実態調査の変容を分析することにより、1年間の研究成果がより具体的に捉えられる。 成果報告書を作成し、県市部会にも周知することにより、成果も共有化できる。</p>
------------------------	---	---

5 研究のまとめや成果の普及方法等の見通し

<p>1 研究のまとめについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究内容ごとに立てた仮説がどの程度達成できているか検証し、分析・考察する。 ・子どもたちの変容を把握し、分析・考察していく。 ・実践研究の経過と状況を「研究紀要」にまとめていく。 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成果は、今後の実践に活用し、課題は、今後の研究課題とする。 <p>2 その後の実践等への活用について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次年度の全体計画・年間計画及び単元構想等の改善に生かす。 ・本校なりの考え方をさらに強化補充し、本校のブランドとする。 <p>3 本研究成果の発信について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校ホームページに研究状況を掲載する。 ・平成26年11月21日に研究大会を開催し、授業公開・基調提案を行う。 ・1年間の研究状況を整理して「紀要」を発行し、県内外に送付する。 ・研究会・授業研究会等を通して、市内及び県内の各小学校等と交流を行う。 ・校区の中学校・地域・保護者に、オープンスクール等を通して授業公開する。 ・徳島市教育研究所の研究協力校として、研究成果を「紀要」に掲載してもらう。 ・国立教育政策研究所の研究協議会で発表し、協議・交流を深める。
--

※ここまでをA4判用紙、縦長、両面で1～2枚程度に収めて作成してください。